

若者たちと労働の未来



若者労働者協同組合への挑戦

菊地 謙 (日本労働者協同組合連合会・センター事業団)

この文章は、『教育』(国土社)の1996年2月号に掲載されたものを、執筆者の了解を得て、本誌に転載させていただきました。紙面の都合上、一部を割愛させていただきました。(編集部)

雇用不安と若者

96年の大卒者の求人倍率は前年の水準も割った。バブルの時代に大量採用し、また今リストラという大量整理を始めた多くの企業には、様々に

批判の声が上がっているが、何もひとり企業のみ先見性がなかったわけではない。この不況はその原因が、企業を中心とする日本の社会・経済構造の変化にあるといわれている。日本の経済を支えてきた中小零細を始めとする多くの製造業は国際化の競争に晒され、海外移転か廃業かを迫られており、たとえ今後景気が回復したとしても従来の雇用は確保できるとは限らない。現在のところ主に大企業の管理職がリストラの対象として騒がれているが、当然のように若年労働者にもその波

は襲ってくる。

今まで高校や大学を卒業して社会に出る若者のほとんどは、「会社」に就職することで社会人としての資格を手に入れた。それは、ついこの前まで親や教師、そして本人にとっても疑うことのないことであった。しかし、いまや「会社」を中心にした人生設計は自明のことではなくなりつつある。この度、日経連の出した『新時代の「日本の経営」』という文書の中でも、今後の雇用形態は多様化し、労働者を専門性や技能で分類したうえで、一般職についてはステューデスのような短期の契約社員（雇用柔軟型グループ）を大量につくことを提案している。むろんこれには、異論も多いだろうが、いずれにせよ今後、個人が複数の会社と契約したり、短期間にいくつも会社を変わるというように多様な働き方が一般的になってくるのであろう。

「会社」以外の働き方

(略)

日本の非営利組織

いずれにしても、生産性や経済性を優先する社会から、暮らし・地域・生命といったソフトや情報やサービスといった分野の充実への転換がこれからますます進んでいかざるをえないであろう。しかしながら、それらの領域をすべて「会社」が担えるかという疑問を持たざるを得ない。なぜならこれらの人間の生活そのものにかかわる、医療や福祉や環境や地域での生活を守るといった類の仕事はどれも「営利」を追求することを本来の目的とした「会社」には馴染みにくいものであるからだ。現に生活という面でははるかに日本より豊かであるとされるヨーロッパやアメリカには、前者では協同組合、後者では非営利団体(NPO)というものが社会的にも非常に大きな勢力として存在している。日本でも震災時に本当に素早く柔軟に救援や援助を行ったのは、個人の自発性に支えられたボランティアや非営利団体・地域のグループであったことがはっきりして、ようやくボラ

ンティアや非営利事業を支える法律の枠組みが検討され始めた。ただ、現時点で言うと前述したような「社会の役に立ちたい」という若者が活躍することが出来るような、社会的な受け皿は、現在の日本ではまだあまりに貧弱である。

私と労働者協同組合

かく言う私もつい4年前に、「卒業後いかなる仕事をするか」に悩んでいた。国際協力の分野に進みたいと思っていたが、政府開発援助(ODA)への批判を開きかじっていたこともあり公務員は希望せず、いくつかの民間団体(NGO)への就職を考えたが、大きい部類の団体でも日本での専従職員は10名程度で、経済的にも新規に職員を採ることは難しかった。また、その当時私が関わっていた、外国人労働者支援の市民グループも専従者を抱えるような経済的な基盤は全くなかった。そんな時ふとしたきっかけで労働者協同組合を知り、その新しい理念と働き方に興味を持ち、事務局に応募した。(後略)

若者と労働者協同組合

私が働きだした頃(約4年前)から、労働者協同組合では大学卒の新人を本格的に採用しはじめた。組織としても、はじめての中期事業計画をつくり、事業と運動が飛躍的に進展してきたこともあり、労働者協同組合づくりを中心となって担う若手の事務局員が多く必要になり、その後、毎年20人から30人の新卒者を「事務局員(候補)」として採用してきている。事務局とは言っても、新卒の場合、研修が終わって最初に配属されるのは、大抵、全国に60程ある事業所の一現場である。私たちの手がける事業の多くは委託・請負型のサービス業である。本来であれば、生産設備を持って自前の事業を行いたいところなのだが、残念ながらまだ資本も技術も弱く、「自分たちがやれる仕事なら何でも」というのが実情である。事業内容としては、公園の維持管理や病院等の清掃管理、そして生協等の物流センターの庫内作業といった分野が多く、新人の場合、現場の仕事をしなが

労働者協同組合の基本を一から学ぶのであるが、さすがにいきなり毎日トイレ清掃というのにショックを受ける者も多い。一部の企業では社員研修にトイレ清掃を取り入れているという話もあるが、私たちの場合、別に精神修養の意味でやっているのではなく、それが仕事だから行うのである。「大学まで出て清掃をしなくても」と言われることもあるが、実際にやってみると、肉体労働であり社会的にも本当に必要な仕事であるにもかかわらず、金銭的にもいかに低い評価しか受けていないかを身を持って感じ、まずはその矛盾とも闘うことになる。

現在は、組織がどんどん拡大していることもあって、ほとんどが自分の親や祖父母の世代の間柄のなかで、1年も経つ頃には、現場の責任者としての役割を担うこととなる。当然、仲間として認められ、信頼も得られなければ現場をまとめていけないし、仕事先との関係も作っていかねばならない。事務局員の実際の仕事の中身としては、現場の仕事の他にも週や月の計画づくり、年間の事業計画づくり、給料計算や各種の経理業務、人の募集と面接、オーナーとの協議や事業所内での会議の準備、そして新たな仕事の開拓、といわば「スーパー総合職」とでも言うべきものがあり、単に人の役に立ちたいからということだけでも続けられない。しかし、何よりも難しいのは、自分が日々忙しく働いていることにどんな意味があるのか、そして自分がこれから何を為そうとしているのか、を常に考え続けていなければならないことではないかと思う。日本の労働者協同組合は、歴史も浅く、社会的にもまだあまり知られておらず、評価も定まっていない。仕事の中身も他の企業と全く同等に競争にさらされることが多い。それがゆえに、いつも自らの位置を問い返していないと、いつのまにか流されて気がつくとの「会社」と何ら変わらないことになってしまいかねない。

B 事業所の実践

私の場合、この3年あまり、主にひとつの事業

所づくりに関わってきた。わずかな経験ではあるが、そこで私が感じてきたことを紹介したい。

労働者協同組合の事業の分野のひとつに病院関連の事業がある。これまでに全国の130程の病院等のメンテナンスの仕事を手がけているのだが、93年の4月より東京の板橋区にあるB臨床検査センターの集配業務を受託した。私は事業を開始する半年ほど前に、そのB検査センターの事業所(労働者協同組合では「事業所」が運営の最低の単位になる)に配属になり、数カ月後に配属になったもう一人の同期の事務局員とともに、検査センターの委託という全く初めての分野の事業をスタートさせることになった。

首都圏の病院を車で回り契約先の病院から患者さんの血液や尿の検体を預かり、その検査結果をまた病院に返却するのが仕事の主な内容であるが、2人とも学校を出たばかりで他の企業で働いた経験もなく、業務開始とともに新規に募集した5人の組合員と共に悪戦苦闘の毎日が続いた。まず、業務に習熟すること、そして検査センターの職員も一緒に働くなかでいかに協同組合らしい運営を行うか、が課題であった。私にとっての大きな誤算は、労働者協同組合ならネクタイを締めなくて良い、と思って入ったのに、病院を回るという仕事柄、毎日スーツを着なければならなくなってしまったことである。2着しかないスーツを着て、数本しかないネクタイを慣れぬ手付きで結んで、仕事に通う毎日が始まった。

ただ、幸いだったのは、その検査センターが、委託に当たり基本的に労働者協同組合の理念や目的に賛同し、私たちを気長にサポートしてくれたことである。そのおかげで未熟ながらも、何とか大きな失敗もせず、仕事も安定し、徐々に私たちに委託される部分も増えてきた。現在では関連の業務も含め、そこで働く組合員が全部で30人ほどになっている。その内、約2/3が20代から30代の若い世代である。

企業とは違う働き方とは？

年齢も性別も学歴もこれまでの仕事の経験もバ

ラバラな人間が求人雑誌等を見て応募し、もちろん労働者協同組合について何の知識も持たないところから、「一般企業とは違う」働き方をつくるというのは本当に難しいことであり、一朝一夕でうまくいくものではない。特に、組織も仕事も一から自分たちで確立するということは、初めは明確な基準や規則がないだけに、だらしなさや無責任を生むこともある。業務マニュアルや就業規則、賃金体系等を一つ一つ話し合いながら作り、2年半が過ぎてようやく組織的にも落ち着きが出てきた。

無論その間には、そのようなやり方が納得できないということで辞めていった者もいるし、欠員が多く仕事が回らなくなって青息吐息になったこともある。しかし、3年目からは20坪程の部屋を自分たちの事務所として借りることが出来るようになり、事業所としてもようやく新たな事業を発展させる環境が整ってきた。

新しい仕事おこしへ

ただ、若い事業所だけに、将来に向けての不安もある。現在、働いている組合員は、20代30代の独身者か、すでに子供が独立してしまった年代層かのどちらかであり、いわゆる働き盛りで一番収入が必要な世代を支えるだけの賃金水準は、現在のところまだ作れていない。絶対に赤字を出さないことを原則に経営を守ってきたが、毎年の賃上げを実現するには、それなりの収入の増加を伴わなければならない。1年目、2年目と僅かながらでも賃金改定を行ってきたが、今年度の賃金改定の議論の中でも、現在の委託の事業に頼るだけではすぐに限界が見えるし、利益の一部を「仕事おこし基金」として積立て、自分たちで新しい事業を開拓していくことで賃金も上げていこうということになった。具体的には、とにかく、毎日首都圏の80から100の病院を回っている実績を使って、医療や福祉関連の新規事業を起こすことや、車での集配という特色を生かして、運送業の免許も取りもっと幅広く営業していくことなどを考えている。また、都認定のヘルパー講座にも積

極的に参加し、現在までに4人が3級の資格を取得した。この分野でも道を拓きたいと考えている。その意味では、たまたまそこにあった仕事から、ようやく今、自分たちがやりたい仕事、そして働き続けていける条件作りへ、仕事も自分たちも「自立」の時を迎えているのだとも言えるだろう。

労働者協同組合の可能性

実際のところ、ただがむしゃらに労働者協同組合をつくりたいという思いだけでとにかく進んできたが、気がつくといつの間にか私と同じ年代の仲間が増え、B事業所は労働者協同組合の組織のなかでも希有の、若者が中心となって働く事業所になっていた。若い世代が多いがゆえに、人間的な未熟さもあり組織の運営としても難しい面もあるが、反面、それぞれの個性を生かし支え合っていく余裕も出てきた。これまで電子部品の営業をやっていて転職してきた20代の女性は、ある会議で自分たちの働き方について「ルールの上をいかに走るかではなく、ルールを作るところから自分たちでやる場所だ」と思っており、「みんなで一つのものをつくりあげるところに喜びがある」と語っている。若い世代にとって協同組合で働くことは、会社で働く以上に自分を律すること、他人を思いやるが必要になり、創造性も必要となる。これらを互いに学び合いながら、働き自己実現の場をつくれたら、と考えている。

日本労働者協同組合は失業対策事業の中高年の仕事おこしからスタートしたこともあって、仕事の主力は労働集約型の仕事であり、実際に就労している人も中高年が大部分を占める。私たちと同じように協同組合方式で事業を運営する組織として生活協同組合の女性が中心となって仕事おこしをしている「ワーカーズ・コレクティブ」の場合をみても、協同組合が「助け合い」という考え方を持っている以上、高齢者や女性という、いわゆる社会的に弱者の組織として、労働者協同組合がスタートすることは、当然のこととも言える。その意味では協同組合は資本企業の反面であり、

企業社会の足りない部分を補完するものである、というような言われ方もする。しかし、今日では、企業を中心とした社会、経済のありかたにもはや限界が見えつつあり、それに対抗するもの、もしくは代わるものとしての協同組合という再定義がなされ始めている。

高齢者協同組合の意味

(略)

オウム世代として

オウムの事件はいまだにマスコミを賑わせている。しかし、彼らが特殊な人間で、それ故異常な行動に走ったという報道のされ方では、決して本質的な説明にならないように感じる。彼らも私と同時代の若者であり、「人の役に立つ仕事をした」と思って労働者協同組合にやって来る若者と、そう大きな違いはないのではなかろうか。むしろ、純粋に世の中の矛盾に悩んだがため宗教の力を頼むのだろうし、価値が混乱し管理社会が行き詰まれば詰まるほど、より人間らしく生きたいと願う人はこれからも増えていく。

自らの精神を高めることを目指した修行が、最終的にハルマゲドンという論理に行き着いてしまったことは悲劇であり、それを認めることはできないが、現在も教団に残って修行を続けている出家信者の話を雑誌等で読むかぎり、その誠実さには共感できる部分もあるし、脱会しても「こちら」側にも居場所がないだろうなとも思う。

現代の若者は、などと一括りにするつもりはないが、私自身、10代から20代にかけて自分と自分の回りの世の中との関係を考えるようになった頃から、どうしても拭いがたく感じ続けてきているのは、世の中に対する、そこはかたない絶望感、無力感である。もちろんそのことを思い詰めて出家する、ということには私の場合ならないが、「出来上がってしまった」社会への無力感とでも言うべきものが、こころの奥底にべったり貼りついていく気がしてならない。オウムの事件を見ても、多かれ少なかれこのような感覚が、私と同世

代の人間にはあるのではないかと感じている。別の言い方をすると、「社会」が果てしなく速くに存在し、決して自分の手では触れることすら出来ないという距離を感じ、それゆえ個人の内面世界で自己完結さえしていればよいというスタンスである。あとは、他人との関係でもひたすら「終わりなき日常」(宮台真司)を生きるテクニックを身につける、ということになる。

無力感を乗り越えて

ただ、私自身はこのような距離感が全く乗り越えられないのかということそうでもないような気がしている。現実には実社会に出て様々な経験をするうちにそんなナイーブな考え方は捨ててしまう、もしくは世の中のウラを知りそんなものだと開き直ることもあるとは思ふ。しかし、案外、窓を開けないで空気が悪いと思っていることも多い。ちょっと手を伸ばして窓を開けてみることで、はっきり見えないまでも社会の輪郭くらいは感じることができたりする。抽象的な言い方になるが、私にとっての労働者協同組合は、窓を開け社会を見据え、戸を開けて一歩づつにじり寄っていく作業のように思っている。

いずれにしても、若者が自分の生き方を真剣に考えたときに、今のようではないもう一つのあり方を考える選択肢があることは重要なことである。もちろんそこへ行って修行をすれば誰でも救済されるわけではない。そして、労働者協同組合だけが全てではない。しかし、労働者協同組合という働き方は、自分たちの未来を開く力を自分たちでつくるためのひとつの大きな力を持っているのだと思っている。